

大豆収量安定へ



新しい手法で種をまく関係者

【三重・伊勢】JA伊勢は、玉城町の圃場（ほじょう）約25㍍で、部分浅耕一工程播種（はしゅ）法で大豆「フクユタカ」を試験的に播種した。この技術を本格的に実証するのは、県内で初めて。

この技術は圃場の排水性が適度に保たれ、発芽率の向上や湿害・干ばつ被害への抵抗性が期待される。畝立てから排水溝の作成、前作麦稈（ばっかん）のすき込み、大豆の浅耕播種を一工程で完了できることから、作業効率向上も期待される。

三重・JA伊勢 県内で初実証

で収量が低いことが課題だった。そこで同JAは大豆の収量安定のため、この技術を試験的に導入することにした。

この技術は大豆の国内有数の産地、福岡県で開発。播種爪の一部をカルチ爪に交換することで、深く耕起する

部分浅耕一工程播種法を試験

部分と浅く耕起する部分をつくり、浅く耕起したところの未耕起部分に接する深さに播種する。降雨時に深く耕起した部分が排水路となつて湿害を防ぎ、干ばつ時には未耕起部分から供給される水分で発芽が促進される。

当日は、県農業研究所と伊勢志摩地域農業改良普及センターの協力の下、担い手が管理する圃場に大豆を播種した。隣接する圃場約25㍍にも慣行耕深で播種し、今後は同研究所と同センターと連携しながら、生育状況や収量を調査・比較する。

同JAの担当者は「この播種法を導入することで、収量安定につなげたい」と話す。